

## スズメバチ

命に関わるほど危険な日本の動物を挙げるとすれば、北海道のヒグマや沖縄のハブを挙げる人は多いと思いますが、死者の数や被害者の数でいえば、スズメバチの右に出るものはありません。毎年 30～40 人に及ぶ死者が出ています。

ハチの針は産卵管が変化したもので、体内の毒の袋につながっています。とくに、スズメバチの場合は、蛋白質系のもので、赤血球を破壊したり、神経を麻痺させる作用があり、激痛や腫れ、時には死ぬ場合もあります。

被害を防ぐには、とにかく近寄らないこと、体の周りを飛び回ることがあっても手で払ったりしないで早くその場を去ることが大切です。時々、カチカチという警戒音を鳴らしながらまわりつく場合がありますが、これは「もうすぐ攻撃するよ」という前触れなのですぐに逃げることです。

もし運悪く刺された場合は、傷口から毒を絞り出し、水やお茶でよく洗うことです。ハチの毒は水溶性なので有効な処置です。後は、抗ヒスタミン剤配合の軟膏があれば傷口に塗って冷やすといいでしょう。

私も少年時代から、ハチには随分刺されましたが、「ハチが怖くて昆虫採集が出来るか」などと粋がっていましたが、結構これが痛いには参りました。

刺された時の痛みですが、ベッコウバチやアナバチなどの単独生活をするハチに比べて、集団生活をするミツバチやスズメバチの方が痛みやダメージははるかに大きかったように思います。また、小さいハチは刺されても痛くないだろうとたかをくくっていましたが、青色の金属光沢を持つセイボウにやられた時は思わず唸ってしまいました。

ミツバチやスズメバチの巣にぎっしり詰まった幼虫は、捕食者にとっては大変魅力的な蛋白源です。したがって、彼らの毒が強力なのは、強力な防衛力がなかったら、あっという間に食い尽くされてしまうからだと思われます。

スズメバチの天敵の中で、最も脅威的な存在は、やはり我々人間のようです。スズメバチの分布の中心である東アジアの各地では、今でも膨大な量の巣が食料として採集されています。スズメバチの攻撃が黒い部分に集中するのは、こうしたアジアの民族の髪や瞳の色と大いに関係があるという学者さえいるくらいです。

日本で一番大きなスズメバチといえば「オオスズメバチ」で、その次に大きいのが「ヒメスズメバチ」です。これらに刺されるとショック死することもあります。事実私の友人のおじいさんも畑で作業中にスズメバチに襲われて亡くなっています。

彼らは肉食性で、ありとあらゆる昆虫を捕らえては巣に持ち帰っています。猛毒のためほとんどの鳥から敬遠され襲われることはありませんが、タカの仲間の「ハチク

マ」という鳥だけは例外で、スズメバチの幼虫、サナギ、成虫を常食としています。ハチクマは秋には東南アジアに渡る夏鳥です。

餌をとる様子を見て見ましょう。まず、写真 1. はヒグラシを襲っているスズメバチです。暴れるセミを取り押さえようとセミの頭部に針を刺しているところです。セミの痛みが伝わってきそうですね。



写真 1. 山道で出会ったセミを襲うスズメバチ(2005.8.4)

写真 2. は、アブラゼミを襲撃中に交通事故にあってしまったスズメバチです。この時期、こういう光景をよく見かけます。



写真 2. アブラゼミを襲っている最中に交通事故にあったスズメバチ(2005.8.22)

山道で出会ったスズメバチの襲撃シーンです。このように、子育てのシーズンになると手当たり次第に手ごろな昆虫達を襲っては巣に持ち帰っています。



写真 3. カナブンを襲うスズメバチ(2005.8.22)

さて、彼らの巣はどんなところにあるのでしょうか。

まず、「オオスズメバチ」は地中のネズミやモグラの穴などに巨大な巣を作ります。「ヒメスズメバチ」は樹上に巣を作りアシナガバチ類の巣を襲いその幼虫を餌にします。「キイロスズメバチ」は軒下などに巨大な球形の巣を作ります。オオスズメバチに比べて体の小さいキイロスズメバチはオオスズメバチの攻撃対象となるため、この時期非常に攻撃的になります。

写真4. は「コガタスズメバチ」の巣です。池河内湿原で蝶の写真を撮影中に偶然見つけたものです。巣の表面にたむろしているコガタスズメバチの大きさから類推すると、直径が 30cm ほどの巣であることがわかります。



写真 4. コガタズメバチの巣(池河内湿原:2005.8.24)

この巣は、市道から 10m ほどしか離れていない(写真 4.、5.ともデジカメの 10 倍望遠)ので、蝶の撮影に来るたびに注意して観察していました。台風が通り過ぎた 10 月 10 日に尋ねてみると、巣は無残な姿に変わりはてていました。数匹のハチが巣の表面にいましたが、1 週間もしないうちに姿が見えなくなりました。巣を放棄したようです。



写真 5. 台風の被害を受けたコガタズメバチの巣(池河内湿原:  
2005.10.10)

新緑の時期を迎えると、土中や朽木の中で冬の間眠っていたオオスズメバチの女王蜂が目を覚まし、その年の秋に誕生する新女王に次の世代を託すべく、活動を開始します。

写真 6. は早春(2003年4月3日)の中池見湿原で突然目の前に現れたものをあわてて撮影したものです。この時期、昆虫類は殆ど見られず、距離にして1m近くの撮影だったので、とても大きく感じたのを鮮明に覚えています。実際の大きさは、5cmほどだったと思います

刺されれば命に関わるので、不用意に近づいてはなりません。また、ミツバチの場合は1度しか刺しませんが、それは人間の皮膚に毒針を刺した時、針と一緒に内臓の一部がちぎれて死んでしまうからです。ところが、ミツバチ以外のハチはミツバチとは異なり、何度でも刺せるので注意が必要です。



写真 6. オオスズメバチ(中池見湿原:2003.4.3)

巣はモグラの穴などを利用して地下に作られます。材料は枯れ木の繊維質を材料にします。我が家の庭でもスズメバチ達が巣の材料を求めてやってきて、庭木を支える杭の繊維質を食いちぎっては持っていきます。アシナガバチなども同じような行動をとっています。庭の杭が年毎にやせ細っていくのはスズメバチ達のせいでもあるのです。

女王蜂は、六角形の部屋を1日に1部屋のペースで増やしていきます。1個1個産み付けられた卵は幼虫から蛹になり約40日で羽化して働き蜂になります。この間、女王蜂は「巣の拡張」、「外敵からの防衛」、「幼虫の餌集め」などをたった1匹で行います。

羽化した働き蜂達が樹液や果実、セミやコガネムシあるいは蛾の幼虫などの「餌運び」、その他「巣材の搬入」などの仕事を分担するようになると、巣は急速に大きくなり、育児室が層状に重なっていきます。巣の直径が70～80cmにもなると、巣の中は百から数百匹の働き蜂が暮らすようになります。



写真7. オオスズメバチ

働き蜂は、幼虫1匹ごとに昆虫の「肉団子」(蝶や蛾の幼虫などを細かく噛み砕いて肉団子状にしたもの)などの餌を与え、代わ

りに幼虫の唾液腺から出る分泌液をなめます。この分泌液には豊富な「糖分」の他に「蛋白質」も含まれています。これが、成虫と幼虫との間で行われる「栄養交換」で、女王蜂の餌の大半もこの分泌液です。

万が一、巣から出られなくなるような緊急事態が発生した場合には、成虫は幼虫を餌代わりにしてその場をしのぎます。幼虫はいわば「食物の貯蔵庫」としての役割もあるというわけです。

さて、秋が近づき、餌になる昆虫も少なくなってくると、働き蜂たちは自分より小さいキロスズメバチなどの巣を襲って幼虫を餌として巣に持ち帰ります。

最近、ミツバチの巣箱がキロスズメバチに襲われて全滅したという話をよく聞きます。宅地造成などで地下に巣を作ることが出来ず、オオスズメバチの生息地が減っているようです。オオスズメバチの減少で、代わりに、キロスズメバチが勢力を伸ばしたためとも考えられます。

---